

# 古期ヒッタイト語における 三人称主語の表現形式についての統語論的考察

— 自動詞を述語とする文を中心に —

松川陽平

## 1

インド・ヨーロッパ語族の中でも古い時期に属しているヒッタイト語では、他の古いインド・ヨーロッパ諸語（ex. サンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語など）と同様に、三人称の代名詞を主語<sup>1)</sup>とする文において、1) 以下の例文(1),(2)のようにその主語を動詞活用語尾形に含まれる文法的意味（grammatical meaning）、すなわち人称（person）や数（number）のみで、総合的（synthetic）に示す場合（以下、ゼロ代名詞形と呼ぶ）、2) 例文(3),(4)のように前接的（enclitic）代名詞<sup>2)</sup>の主格形でその主語を示す場合（以下、-Aš形と呼ぶ）、3) 例文(5),(6)のようにapā-（that）という指示代名詞の主格形を用いてその主語を示す場合の三通りがある。

(1) ša-aḥ-ḥa-an-na iš-š[a-i] H.G.I. § 40.39.

”そして彼は封建領土を経営する。”

(2) šu-uš ša-al-la-nu-uš-kir StBoT.17.A.Vs.5.

”そして彼ら（神々）は彼ら（息子達）を育て上げた。”

(3) na-aš a-ki H.G.I. § 4.8.

”そして彼は死ぬ。”

(4) ne a-ra-an-da StBoT.12.Vs.1.6.

”そして彼らは立っている。”

(5) a-pu-u-un-za a-pa-a-aš da-a-i H.G.I. § 74.70.

”あれ（角か足を折られた牛）を（牛の角か足を折った）彼（=”あれ”）が、自分にとる。”

(6) [a]-pi<sub>2</sub>-e<sup>MUŠEN</sup> ḥa-a-ra-na-an wa-a[ḥ-nu-wa-an]-zi StBoT.8.Vs.11.47.

”彼ら（=”あれら”）は驚を回転させる。”

これらのうち、本稿で問題の対象としているのはゼロ代名詞形と-Aš形で、三人称主語をapā-で示される形式は対象とされない<sup>3)</sup>。そして本稿の目的は、古期ヒッタイト語テキストを資料として、三人称主語を表す場合、ゼロ代名詞形と-Aš形が統語論的にどのような条件の下で使い分けされる傾向にあるのかを記述することである<sup>4)</sup>。資料としたテキストは、

Garrett (1990:6-8) で示されている古期ヒッタイト語テキストである。

## 2.

### 2. 1

ヒッタイト語において三人称主語を示す場合に、-AŠ形とゼロ代名詞形がどのような条件の下で使い分けられるかについて先行研究<sup>5)</sup>で明らかにされていることは、ある文の述語が自動詞の場合には-AŠ形が用いられるが、他動詞<sup>6)</sup>の場合には-AŠ形は全く用いらず、ゼロ代名詞形が現れるということである。

☆述語が自動詞で-AŠ形が現れる例文。

(7)ša-aš ša-ra-a URU-ya pa-it StBoT.17.A.Rs.14'.

”そして彼は都市へ上って行った。”

(8)ne ha-aš-ša-aš kat-ta e-ša-an-ta StBoT.25.Nr.54.Rs.111.10'.

”そして彼らはかまどの横に座る。”

☆述語が他動詞でゼロ代名詞形の例。

(9)ša-an iš-tah-ta StBoT.17.B.Vs.5'.

”そして彼はそれを味わった。”

(10)ta ID<sub>2</sub>-an za-a-i H.G.I. § 43.53.

”そして彼は川を渡る。”

### 2. 2

先行研究で示されているように三人称主語を-AŠ形を用いるかゼロ代名詞形を用いるかという出現条件は、先ず、述語動詞が自動詞か他動詞かで決まっているので、それらの出現条件を更に考察するにあたり、以下では他動詞が述語動詞の場合は考慮しない<sup>7)</sup>。しかし、本稿で最も明らかにしたいと考えていることでもあるが、以下の例文のように述語として自動詞が現れる場合にもゼロ代名詞形で示される場合もある。

(11)ta e-ša-an-da StBoT.12.Vs.1.18.

”そして彼らは座る。”

(12)ta DUMU.SAL-ši-ya ša-li-ga H.G.II. § 81.51.

”そして彼が彼の娘とも性交をもつ。”

(13)A-NA LUGAL he<sub>2</sub>-ek-ta StBoT.25.Nr.59.Vs.1.5.

”彼は王に対してお辞儀する。”

(14)A-NA <sup>DUG</sup>UTUL<sub>2</sub> pa-iz-zi H.G.II. § 58.15.

”彼は深鍋のところへ行く。”

(15)<sup>U</sup>[<sup>RU</sup>Ne-e-š]a-aš <sup>LU</sup>2KUR<sub>2</sub>-š// e[-eš-tu] StBoT.18.Vs.35.

”彼はNeša都市の敵であれ！”

また、上記の例文(15)とともに意味的に eš-(be) という動詞が省略されていると思われるような場合もゼロ代名詞形で示される場合もある<sup>8)</sup>。

(16) a-pi<sub>2</sub>-e-[e<sub>1</sub> E<sub>2</sub>-ZU] ku-e-la <sup>G1š</sup>e-ya-an a-aš-ki-iš-ši ša-ku-wa-an  
a[-ra-a-u-wa-an] H.G.I. § 50.62.

”eya-の木がその屋根に認められるその家は自由(である)。”

その他このような例は、aniya- (働く) H.G.I. § 10.27./, ar- (到着する) StBoT.17.A.Vs.8./, aruwai- (ひれ伏す) H.G.I. § 55.19./StBoT.12.Vs.1.29./ StBoT.12.Rs.111.19’./StBoT.12.Rs.1V.30’./, eš- (be動詞) StBoT.18.Vs.24./, eš- (座る) StBoT.12.Vs.1.19./StBoT.25.Nr.27.Rs.!.20’./, ħink- (お辞儀する) StBoT.25.Nr.59.Vs.1.6./StBoT.25.Nr.59.Vs.1.10./, ħuek- (誓う) StBoT.25.Nr.112.Rs.111.9’./, ħuya- (走る) StBoT.8.Vs.1.3’./StBoT.25.Nr.31.Rs.111.8’./, kiš- (一となる) H.G.I. § 49.56./, pai- (行く) H.G.I. § 93.36./H.G.I. § 93.37./StBoT.12.Rs.1V.32’./StBoT.12.Rs.1V.35’/StBoT.17.A.Vs.15./StBoT.18.Rs.68./StBoT.18.Rs.78./, šalik- (一と性交をもつ) H.G.II. § 81.53./, SIR<sub>3</sub><sup>R<sup>U</sup></sup> (歌う) StBoT.25.Nr.34.Vs.14’./, tiya- (歩む) StBoT.12.Vs.1.2./StBoT.12.Vs.1.3./StBoT.12.Vs.1.6./StBoT.12.Vs.1.8./

以上の34例の自動詞が述語の場合にゼロ代名詞形となる。

一方、次の例文のように-Aš形をとる自動詞は59例存在する。

(17) na-aš a-ki H.G.I. § 75.73.

”そして彼は、死ぬ。”

(18) na-aš-kan<sub>2</sub> ku-uš-na-az [(ša(-me-en-zi))] H.G. § 11.34.16.

”そして彼は報酬から姿を消す(報酬を断念する)。”

(19) na-at] a-ap-pa le-e u<sub>2</sub>-e-eh-zi StBoT.8.Rs.1V.3.

”そしてそれが再び向かないように!”

(20) ne-eš-ša-an <sup>NA4</sup>pe<sub>2</sub>-e-ru-ni u<sub>2</sub>-e-ta-an StBoT.25.Nr.140.Rs.16’.

”そしてそれらは岩に建てられる。”

その他このような例は、ak- (死ぬ) H.G.I. § 6.15./H.G.I. § 38.33./ H.G.I. § 42.49./ H.G.I. § 44.a.54./H.G.I. § 75.75./H.G.I. § 76.77./H.G.I. § 84.17./H.G.II. § 23.13./ StBoT.17.A.Rs.13’/, ar- (到着する) StBoT.17.A.Rs.7’./StBoT.25.Nr.112.Vs.11.17’./, ar- (立つ) StBoT.12.Vs.1.6./, eš- (be動詞) Otten (1951:129) Vs.4./Otten (1951:129) Vs.5./, eš- (座る) StBoT.25.Nr.54.Rs.111.10’./, BA.UG<sub>6</sub> (死ぬ) H.G.II. § 38.29./, GEME-aššareš- (不自由の身になる) H.G.I. § 35.26./H.G.II. § 60.18./, ħark- (滅びる) H.G.I. § 75.74./KUB.36.Rs.7./, idalaweš- (仲たがいする) H.G.I. § 53.9./, iyannai- (行軍する) StBoT.17.A.Rs.7’./StBoT.18.Rs.72./, kiš- (一となる) H.G.I. § 40.42./H.G.I. § 45.58./H.G.I. § 71.67./, lazziya- (健康になる) H.G.I. § 10.27.(x2)/,

pai- (行く) H.G.I. § 23.59./H.G.I. § 23.61./H.G.I. § 42.48./H.G.II. § 15.5./StBoT.12.Vs.1.2./StBoT.12.Vs.1.7./StBoT.12.Vs.1.35./StBoT.17.A.Rs.14’./StBoT.17.B.Rs.18’./StBoT.28.1.h.Rev.IV.10./StBoT.28.1.h.Rev.III.11’./StBoT.28.1.h.Rev.III.12’./StBoT.28.1.h.Rev.III.15’./StBoT.28.1.h.Rev.III.21’./StBoT.28.1.h.Rev.IV.3./StBoT.28.1.h.Rev.IV.9./, šamen- (姿を消す) H.G.I. § 48.52./, tarku- (踊る) StBoT.25.Nr.34.Vs.18’./, tiya- (歩む) StBoT.12.Vs.1.6./StBoT.12.Vs.11.13./StBoT.12.Rs.III.7’./StBoT.25.Nr.31.Vs.11.6’./StBoT.25.Nr.33.Vs.(I).16’./StBoT.25.Nr.34.Vs.13’./, uwa- (来る) StBoT.8.Rs.III.12./StBoT.25.Nr.27.Rs!.18’./, zeya- (煮える) StBoT.25.Nr.54.Vs.11.20’./

では統語論的にどのような条件の下で、-AŠ形とゼロ代名詞形が使い分けられているのだろうか。本稿では-AŠ形とゼロ代名詞形で示されている主語が、直前の文においても主語として示されているかどうか、つまり直前の文の主語と、-AŠ形とゼロ代名詞形で示される文の主語が内容的に変化しているか（主語変化）、変化していないか（主語不変）という基準で分類してみたいと思う。その理由は、もし直前の文の主語と-AŠ形かゼロ代名詞形を含む後続の文の主語が同一ならば、あえて-AŠ形を用いるよりもゼロ代名詞形を用いる方が優先されるのではないかという予測と、逆に、直前の文の主語と-AŠ形かゼロ代名詞形を含む後続の文の主語が異なっていれば、-AŠ形がゼロ代名詞形より優先されるのではないかという予測をたてたからである。その結果が次の表1.である<sup>9)</sup>。

表1.

	-AŠ形	ゼロ代名詞形
主語変化	21	5
主語不変	29	26

この表1.の結果から、直前の文の主語と-AŠ形かゼロ代名詞形を含む後続の文の主語が異なっている場合には、-AŠ形はゼロ代名詞のほぼ4倍の割合で現れ、-AŠ形がゼロ代名詞形より優勢であることがわかる。そして直前の文の主語と-AŠ形かゼロ代名詞形を含む後続の文の主語が同一の場合には、-AŠ形とゼロ代名詞形の出現率は競合していることもわかる。以下に主語が変化し-AŠ形の例文と、主語が変化しゼロ代名詞形の例文を挙げる<sup>10)</sup>。

☆主語が変化し-AŠ形の例文。

(21) tak<sub>2</sub>-ku LU<sub>2</sub>.ULU<sub>3</sub><sup>LU</sup>-an ku-iš-ki ku-uš-ša-ni-iz-zi na-aš la-aḫ-ḫa pa-i[z-z]i  
H.G.I. § 42.27.

”もし誰かが人を雇い、彼（雇われた人）が遠征に行き、...”

(22) tak<sub>2</sub>-ku LU<sub>2</sub>-an pa-aḥ-ḥu-e-ni ku-iš-ki pi<sub>2</sub>-eš-ši-iz-zi na-aš a-ki

H.G.I. § 44a.54.

”もし 誰かが 人を火に投げ捨て、そして 彼（前文の”人”） が死んだら...”

(23) <sup>D</sup>UTU-uš <sup>D</sup>IŠKUR-aš ka-a-š[(a LU)]GAL-i SAL.LUGAL-ri DUMU<sup>MEŠ</sup>-ma-aš-ša

<sup>URU</sup>ḥa-at-tu-ši e-er-ma-aš-me-et e-eš-ḥ[(ar-š)]a-me-et i-da-a-lu-uš-me-et

ḥa-tu-ka-aš-me-et ḥa-ri-[(e-nu-u)]n ta-at a-ap-pa ša-ra-a le-e u<sub>2</sub>-e-ez-zi

StBoT.8.Rs.111.12.

”太陽神、天候神よ、見よ！私は Hattuša 都市の王や女王やその息子達のために、彼らの病気や血や悪や恐怖を地中に 埋めた。そして それ（ら） が再び来ないように！”

(24) šu-uš ta-me-eš-šir še a-kir StBoT.17.A.Rs.13’.

”そして 人々が 彼らを 圧迫し、彼らが 死んだ。”

その他の例は、H.G.I. § 1.4.4./H.G.I. § 1.10.7./H.G.I. § 1.35.26./H.G.I. § 1.38.33./H.G.I. § 1.40.42./H.G.I. § 1.71.67./H.G.I. § 1.75.73./H.G.I. § 1.75.74./H.G.I. § 1.75.75./H.G.I. § 1.76.77./H.G.I. § 1.84.17./, H.G. § 11.38.29./H.G. § 11.60.18./, StBoT.8.Rs.IV.3./, StBoT.17.B.Rs.18’./, Otten (1951:129) Vs.4./Otten (1951:129) Vs.5./

☆主語が変化しゼロ代名詞形の例文。

(25) tak<sub>2</sub>-ku LU<sub>2</sub>-an *EL-LAM* ta-pi<sub>2</sub>-eš-ni ap-pa-an[(-zi anda-š)]a-an<sup>11)</sup> par<sub>2</sub>-na

na-a-u<sub>2</sub>-i pa-iz-zi

H.G.I. § 93.36.

”もし 人々が 自由な身分の人を前庭(?) で 捕まえ、彼（自由な身分の人）がまだ家の中に行かないならば、...”

(26) nu LU<sub>2</sub> <sup>URU</sup>Pu-ru-uš-ḥa-an-da kat-tim-mi [(pe<sub>2</sub>-e-ḥu-te-nu-un)] ma-a-an

tu-un-na-ki-iš-na-ma pa-iz-zi

StBoT.18.Rs.78.

”そして私は Purušḥanda 都市の人を私の側に連れて行った。しかし彼が王の部屋へ行くとき...”

その他の例は、H.G.I. § 93.37./, StBoT.25.Nr.31.Rs.111.8’./StBoT.25.Nr.112.Rs.111.9’./

## 2. 3

2. 2の表1.の結果では、直前の文の主語と、-AŠ形かゼロ代名詞形を含む後続の文の主語が内容的に同一の場合には、-AŠ形とゼロ代名詞形の出現率は競合している。ではこのような場合に-AŠ形とゼロ代名詞形はどのような統語論的条件の下で使い分けられているのだろうか。この疑問に対して、本稿ではある文とある文の結び付けられ方に注目してみたいと思う。その理由は、文と文の結び付けられ方と、自動詞が述語の場合の-AŠ形とゼロ代名詞形の統語論的關係も明らかにしてみたいからである。ところで-AŠ形の代名詞は、前述のように前接的な代名詞でアクセントを保持する何らかの形態素に付属して表される。そ

のためヒッタイト語の”そして (and)”の意味を有する”nu, ta, šu”という接続詞<sup>12)</sup>がある場合と、それらの接続詞以外の形態素が文頭<sup>13)</sup>に存在する場合を含めた”nu, ta, šu”という接続詞がない場合（ゼロ接続詞）で、-AŠ形とゼロ代名詞形がそれぞれどのような割合で結びつくのか、という基準で分類したのが以下の表2. である。

表2.

	接続詞あり	ゼロ接続詞
-AŠ形	22	7
ゼロ代名詞形	9	17

表2. より言えることは、-AŠ形が接続詞と共起して出現する方が、接続詞と共起しない場合の3倍ぐらいで優勢である。そして逆にゼロ代名詞形は接続詞と共起しない場合の方が、接続詞と共起する場合と比べておよそ2倍と優勢であると思われる。以下にそれぞれの例文を挙げる。

☆-AŠ形で接続詞の例文。

(27) tak<sub>2</sub>-ku IR<sub>3</sub>-iš hu-wa-a-i na-aš A-NA KUR <sup>URU</sup>Lu-u<sub>2</sub>-i-ya pa-iz-zi

H.G.I. § 23.59.

”もし奴隷が逃亡しそして彼がLuwiyaに行くときは、...”

(28) LUGAL-ša /Š-NE ša-aš ya-an-ni-iš

StBoT.17.A.Rs.7’

”そして王は聞き、そして彼は行軍する。”

その他の例は、H.G.I. § 23.61./H.G.I. § 42.49./H.G.I. § 45.58./H.G.I. § 48.52./, StBoT.17.A.Rs.14’/, StBoT.12.Vs.1.2/StBoT.12.Vs.1.6.(x2)/StBoT.12.Vs.1.7./StBoT.12.Vs.1.35/StBoT.12.Vs.11.13./StBoT.12.Rs.111.7’./, StBoT.18.Rs.72./, StBoT.25.Nr.27.Rs! .18’./StBoT.25.Nr.34.Vs.13’./StBoT.25.Nr.140.Rs.15’./, StBoT.28.1.h.Rev.111. 11’./StBoT.28.1.h.Rev.111. 12’./StBoT.28.1.h.Rev.111. 15’./StBoT.28.1.h.Rev.IV. 3./

☆-AŠ形でゼロ接続詞の例文。

(29) nu E<sub>2</sub>-ri-iš-ši 18) an-ni-iš-ki-iz-zi ku-it-ma-a-na-aš la-a-az-zi-at-ta

ma-a-na-aš la-a-az-zi-at-ta-ma

H.G.I. § 10.27.

”彼は彼（被害者）の家で働く、彼（被害者）が良くなるまで。彼（被害者）が、しかし、良くなったとき、...”

(30) tak<sub>2</sub>-ku /-NA KA<sub>2</sub> E<sub>2</sub>.GAL <sup>GIŠ</sup>ŠUKUR ZABAR ku-iš-ki ta-i-e-iz-zi a-ki-aš

H.G.II. § 23.13.

”もし誰かが宮廷の門において銅の槍を盗めば、彼は死ぬ。”

(31) ša-aš ya-an-ni-iš <sup>URU</sup>Ha-ra-ah-šu-aš a-ar-ša

StBoT.17.A.Rs.7’.

”そして彼は行軍した。（そして）彼はHarahšu都市に到着した。”

その他の例は、H.G.I. § 6.15./H.G.I. § 53.9./, StBoT.25.Nr.34.Vs.18'./StBoT.25.Nr.112.Vs.11.17'./,

☆ゼロ代名詞形で接続詞の例文。

(32) tak<sub>2</sub>-ku DUMU.SAL-Z4 har-zi ta an-ni-iš-ši-a na-aš-ma SAL+KU-iš-ši ša-li-i-ga  
H.G.II. § 81.53.

”もし娘を持っていて、そして彼が彼女の母または彼女の姉妹と性交を持てば、...”

(33)[(LU<sup>2</sup>.MEŠ U<sub>2</sub>-BA-RU L)U<sub>2</sub>-a(š ku-iš)] ku-i[(š LUGA)]L-wa-aš pi<sub>2</sub>-ra-an e-eš-zi  
[(ne ša-ra-a t)]i-e-e[(n-zi nu)] a-ap-pa ti-en-zi StBoT.12.Vs.1.6.

”王の前に座っているUBARUやいかなる人もが起き上がり、そして彼らは後ろへ行き、”

その他の例は、H.G.I. § 10.27./H.G.I. § 55.19./, H.G.II. § 81.51./, StBoT.12.Vs.1.29./StBoT.12.Vs.1.18./StBoT.12.Vs.1.19./, StBoT.25.Nr.34.Vs.14'./

☆ゼロ代名詞形でゼロ接続詞の例文。

(34)LUGAL-uš-ša E<sup>2</sup>ma-a-ak-zi-ya-az u<sub>2</sub>-iz-z[i 20) G<sup>1</sup>Š hu-lu-ka-an-ni-ya e-ša  
StBoT.25.Nr.27.Rs !.20'.

”そして王はmakzi-建物から来る。(そして)彼は馬車に座る。”

(35)ma-an hu-u-ma-an-te-eš-pat<sub>2</sub> mar-še-e-ir [na?]-aš-ma LU<sub>2</sub>MEŠ NI.ZU<sub>2</sub>  
ki-i-ša-an-ta-ti H.G. § 1.49.56.

”全ての者が悪事を行うか、または彼らは泥棒となるだろう。”

その他の例は、H.G. § 1.50.62./, H.G. § 11.58.15./, StBoT.8.Vs.1.3'./, StBoT.12.Rs.111.19'./StBoT.12.Rs.IV.32'./StBoT.12.Rs.IV.35'./StBoT.12.Vs.1.2./StBoT.12.Vs.1.3./StBoT.12.Vs.1.8./, StBoT.17.A.Vs.8./StBoT.17.A.Vs.15./, StBoT.18.Vs.35./, StBoT.25.Nr.59.Vs.1.5./StBoT.25.Nr.59.Vs.1.6./StBoT.25.Nr.59.Vs.1.10./

### 3.

本稿では古期ヒッタイト語テキストを資料として主に自動詞を述語とする場合、ゼロ代名詞形と比べて-AŠ形がどのような条件の下で現れる傾向にあるか、統語論的に考察してみた。その結果としては以下の2点が挙げられる。1) 直前の文の主語と-AŠ形かゼロ代名詞形を含む後続の文の主語が異なっている場合には、-AŠ形はゼロ代名詞形と比べて三人称主語として表記される傾向にある。2) 直前の文の主語と、-AŠ形かゼロ代名詞形を含む後続の文の主語が内容的に同一で-AŠ形とゼロ代名詞形の出現率が競合している場合には、-AŠ形は接続詞と共に用いられる場合に表記される傾向にあり、逆にゼロ代名詞形は接続詞と共に示されない場合に示される傾向にある。ところで、統語論的にはある程度考えられる結果であると思われるが、この結果が-AŠ形やゼロ代名詞形の全ての出現条件・用法・機能を説明してとは思われない。従って今後は資料を更に増やし、この結果も考慮に入つつ、意味論的・談話論的に分析を深めたいと思う。

＊本稿をまとめるに当たり、貴重なご助言をいただいた広島大学文学部言語学研究室の古浦敏生先生と今田良信先生に感謝を申し上げる。

- 1)印欧祖語 (Proto-Indo-European) における主語全般の特性についてはLehmann (1974: 156) を参照。
- 2)ヒッタイト語における、主格形・対格形を表す前接的代名詞の曲用パラダイムは大城・吉田 (1990:40) によれば以下の通りである。そして下線が引かれている形態素が主格形で、本稿に關係する形態素である。

	単数	複数
主格	<u>-aš</u>	<u>-e</u> , <u>-at</u>
対格	-an	-uš, -aš
主格・対格 (中性)	<u>-at</u>	<u>-e</u> , <u>-at</u>

- 3)apā-(that)はFriedrich (1974:62) やKammenhuber (1969:212) によると、ヒッタイト語において三人称指示の”betontes Pronomen”であるが、ka-(this)と対立する指示代名詞という一つのカテゴリーを形成しているし、例えば-Aš形代名詞と異なりテキスト外の情報も考慮しなければならないような直示的 (deictic) な機能を含む形態素であるので本稿では考慮外とした。

- 4)本稿で扱っている問題に対する先行研究は、筆者が調べた限り現在のところ、Luraghi (1990:86) の”Topic, omission and cliticization”という章で扱っているものがある。しかしLuraghiはヒッタイト法の条文の一つだけを用いて論じているし、”the choice between omission (=本稿でのゼロ代名詞形) and cliticization (=本稿での-Aš形) seems to be conditioned by structural, rather than pragmatic, factors”という部分の”structural factors”が具体的にどのような内容なのかも明確にされていない。

- 5)Garrett (1990:145) やLuraghi (1990:87) を参照。

- 6)ある動詞が自動詞か他動詞か区別する基準として、本稿ではある動詞が目的語として対格形の名詞を支配しない場合は自動詞、支配した場合は他動詞とした。そして典型的には以下の例文のように対格形目的語が省略されているとわかる場合は他動詞として分類した。

LU<sub>2</sub> GIŠBANŠUR šu-up-pa-az GIŠBANŠUR-az II tu[-ni-]in-ga-aš

食事を用意する人 汚れの無い(Abl) テーブル(Abl) 2 tuningaの(Gen)

NINDA har-ša-uš da-a-i 36) LUGAL-i pa-a-i

厚いパン(Ac) とる(3sg.pres) 王(c.sg.D-L) 与える(3sg.pres)

StBoT.12.Vs.II.36.



”食事を用意する人はきれいなテーブルからtuningaの厚いパンをとる。（そして）彼は（それ（tuningaの厚いパン）を）王に与える。”

そして、以下の例文のように名詞の対格形が方向格（allative）の意味を有する場合はその文の動詞を自動詞として分類した。

[lil-i]š LUGAL-un SAL.LUGAL-an-na hu-ya-an-zi StBoT.8.Vs.1.3’

王(c.sg.Ac) 女王(c.sg.Ac)+そして 走る(3pl.pres)

”三回彼らは王と女王の方へ走った。”

7)以下の例文のようにヒッタイト語の”言う”という意味の動詞memā-,tar-,te-は、ヒッタイト語の一般的な語順であるS(0)Vとは異なり、その内容を後続の文として示すので、本稿では自動詞か他動詞かという点で例外的とみなし除外している。

nu-uš-ma-aš me-mi-iš-ta ki-i-mu LUGAL-uš pa-i[š-t]a StBoT.17.B.Vs.27’

言う(3sg.pret) これ+私に 王が 与える(3sg.pret)

”そして彼は彼らに言った、（「王がこれを私に与えた。（」）と。”

更に、ヒッタイト法の中で以下の例文のような構文で現れるšuwai-という動詞の意味を他動詞的に”押す”と考える説（Friedrich:1959）や自動詞的に”眺める”と考える説（Haase:1984）があり現在のところどちらの説が正しいかにわかに判断できないので、この動詞も本稿では除外されている。

par<sub>2</sub>-na-aš-še-e-a šu-wa-a-i-e-iz-zi H.G.I. § 13.34.

家(n.sg.D-L)+彼の+そして 押す/眺める(3sg.pres)

”そして彼（被害者）は（彼（加害者）を）彼（加害者）の家へ押しつける”または、  
”そして彼（被害者）は彼（加害者）の家の方を眺める。”

8)同じような構文で、例文（20）のように-AŠ形が現れる場合もある。そして例文（20）の述語uetanは、wete-（建てる）という他動詞と考えられる動詞の過去分詞形である。

9)表1.の数字にはテキストが破損していて直前の文の主語が全く不明確な例は含まれていない。

10)-AŠ形とゼロ代名詞形の出現状況が競合している例や例文は2.3を参照。

11)”anda-š)]a-an”という表記に対して同じ条文内でかつ同じ構文で”[an-d)a-aš-sa-an”（H.G.I. § 93.37）という表記もある。そしてこれらの表記の中には”-aš”が含まれている可能性も考えられるが、Friedrich（1959:116）の語彙リストにはこの箇所の”-aš”は登録されていない。そのため筆者もそれに従うことにした。

12)”しかし（but）”の意味を有する形態素はヒッタイト語では”-ma”であるが前接的なのでそれ自身で独立して文頭に位置しない。

13)前接的代名詞である-AŠ形は文頭の形態素に付加される。そして”nu,ta,šu”という接続詞は文に表される場合、文頭に位置する。

### 参考文献

- Friedrich, J. 1959. *Die Hethitischen Gesetze*. (=H.G.) Leiden.  
1974. *Hethitisches Elementarbuch*. I. Teil. Heidelberg.
- Garrett, A. 1990. *The syntax of Anatolian pronominal clitics*. Harvard University dissertation.
- Haase, R. 1984. *Texte zum hethitischen Recht*. Wiesbaden.
- Kammenhuber, A. 1969. Hethitisch, Palaisch, Luwisch, Hieroglyphenluwisch. *Handbuch der Orientalistik*. 1.2/1-2.2. Leiden-Köln.
- Lehmann, W.P. 1974. *Proto-Indo-European Syntax*. Austin and London.
- Luraghi, S. 1990. *Old Hittite Sentence Structure*. London and New York.
- Neu, E. 1970. *Ein althethitisches Gewitterritual*. (=StBoT.12.) Wiesbaden.  
1974. *Der Anitta-Text*. (=StBoT.18.) Wiesbaden.  
1980. *Althethitische Ritualtexte in Umschrift*. (=StBoT.25.) Wiesbaden.
- 大城光正・吉田和彦. 1990. 『印欧アナトリア諸語概説』 東京.
- Otten, H. 1951. Ein Althethitischer Vertrag mit Kizzuvatna. *Journal of cuneiform studies* 5: 129-132.
- Otten, H. 1973. *Eine althethitische Erzählung um die Stadt Zalpa*. (=StBoT.17.) Wiesbaden.
- Otten, H. und V. Souček. 1969. *Ein althethitisches Ritual für das Königspaar*. (=StBoT.8.) Wiesbaden.
- Singer, I. 1984. *The Hittite KI.LAM Festival, Part Two*. (=StBoT.28.) Wiesbaden.